青岸良吉の敗走

つげ忠男

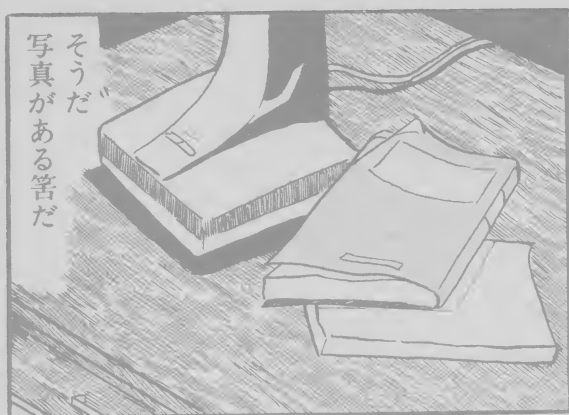
噂はおそらく
あの人の耳にも入って
いるものと思われます

それでも彼は
平然としているのです
……………
大したものです

そうだ
写真がある筈だ

エート
どのあた
りだった
かな
………

いたいた
後の方

化粧品会社
業務販売課係長
勤続十七年
四十六歳

これと言った失敗もないし…………
又、目立った働きもない………

十七年の勤務年数が彼を係長にさせたようです
やあ

ありがとありがと………
熱いですよ………

今年もどうやら終るなあ………

今日は皆んな早く出ていったね………

エート安さんはオリジナル富田さんは少いところ回ってくるって………
暮だからどこも払いが悪いらしいの集金も大変ね………

よし私もお昼
から少し回って
こよう
もうあと
一週間だものなぁ

あらぁ
無理ですよ
……

はっきり
言うなぁ
……
僕だって
……

あ、
ごめんなさい
……
困っちゃう

いやぁ
……
どうにも
……
ガラッ
ヨ
ご苦労
さん!

ウ…
ウ…
どうし
た?

青岸さん
単車で集金は
もう駄目だよ
寒くて寒くて…
車買うように
言って下さい
よ……

判ってるって……僕も再三言ってるんだよ………

駄目だよ青岸さん温和しいんだもんもっと強力に押さないと

いや…いろいろ……言ってるんだが……
三輪君針ないか？

止針ならありますけど何するんですか?

あ〜あ
こっちの話聞いているのかなあほんとに……

ほれここがうんでるだろうすれて痛いからね
つぶすんですか?

あ、青岸さんそういうのは、もっとうみきってからの方が良いよ……今は早いよ
俺も経験あってね根っこがとれなきゃ同じ事だよほんと

そうよねえ…汚いわよねえ…
そうだろか…………

おっ
お呼びだ
……
青岸さん応接室へ
課長がお呼びです
は、はい
すぐ行きます
…………
ち、ちょっと
行って
来る

絶対あの事で
呼ばれたのよ
…………
……
だろう
な…

いくら営業所長に
なるとは言え
あんな田舎の方へ
行くんじゃ結局
おっぱらわれた
形だもんな
…………
彼
行くかね？

あたしは行くと思うな
会社を辞める訳はなし
と言ってゴネる勇気も
ないでしょう
背岸さんて
そう言う人よ

ガラッ
俺は
もうやんな
ったよ

軽でいいからよ
四輪買って
貰わないと
……
単車でつっ走っ
ていられねえよ
凍っちまうよ
……

俺、今日こそ
言ってやるぞ
……
大将は？
安さん
大将、今、課長
に呼ばれてる
んだよ…ほら

んん
そうか
……
いよ〜

今度はもう少し力のある係長に来てほしいなあ

安さん未だ決まった訳じゃないもん
うっかりした事言えないよ……

あら、安さんどうしたの？考えこんじゃって

考えてみりゃあよ十七年間せっせと務めてよ結局は地方の営業所へポイだもんな
勤め人なんてなんとなくわびしいよなあ…

ガラッ

残業でない
限り
青岸さんは
五時迄には
家に着き
ます

四時半に終
り、ゆっく
り歩いても
十五分あれ
ば充分です

平凡な
家庭の夕げの
図が容易に
想像出来る

僕は風邪
の為三日ばかり
寝こんだ…

今日、本当は
起きられたのだが
……なんとなく
休んでしまった

会社で職場は違うのですが
僕の下宿先はあの人の家の前で
割と顔を合わせる機会が多いの
です。話はあまりしない人です
………
僕は青岸さんを見ていると
なんとなくユウウツになるのです
特に転勤の噂が立ってから
余計にその気持が強く
なっているのです

十七年も勤めて
それで地方への転勤とは
随分とむなしいじゃないですか
むなしくてもなんでも
一家の主ともなれば
仕方がないと言うのは判ります

だが
青岸さんのあの
しぶとい感じさえ
受ける無表情
……
あれは一体
何んだろう

良二は
どこの高校
でも良いって
いってるけど

広道はこっちに
就職が決まって
いるしなあ……

広道だけは
板橋のおじさんの
家にお願いしよう
かしら………

で
広道はどっか
行ったのか?

なんですか
野球部の納会と
かで遅くなるので
……あの子も高校
生活の最後だから
のんびりするって

お前はいいんだね…
だったら明日はっきり
返事をするよ……
考えてみりゃあ
田舎の生活も
いいかも知れ
ないさ　ハハハ

あなた
テレビは静
かにね良二
が寝てます
から……
あの子はこれ
から起きて
進学の勉
強ですか
らね

カチ

この頃どうも画面がはっきりしなくなったね……

そろそろしみょうだって広道が言ってたわ……
電気を消してみると良いそうよ……

目を悪くせんかな……

ほ、こりゃぁいい…………

今晩わ奥さん

おのれ……!
おぬしの……と
わからぬ～
エイ
あらおとなりの……さどうぞ
すいません夜分おじゃまして…

スースー

ボン
ボン
ボン
ボン

そこのところ……ああそうか
でしょう……それから五つ目…そうそう

私達の昭和
第二次世界大戦
9:00

どうも遅くまですいませんでした
旦那さんに黙ってっちゃっていいかしら？

じゃよろしく伝えて下さい
はいはい又どうぞ…

あなた
ごめんなさ……
あらあら
うたたねすると
風邪をひきますよ
あなた！

お
お
ねてたか
？

いや
いや
どうも
……
今
お風呂
見てきますからね
……

じ じ じ じ

昭和二十年すでに悪化していた状勢は殊に悪化し、津波のように押しよせる
……

巨大なB29による
連日の爆撃で東京の街は
……

焼けただれ廃虚と化し
無惨に…

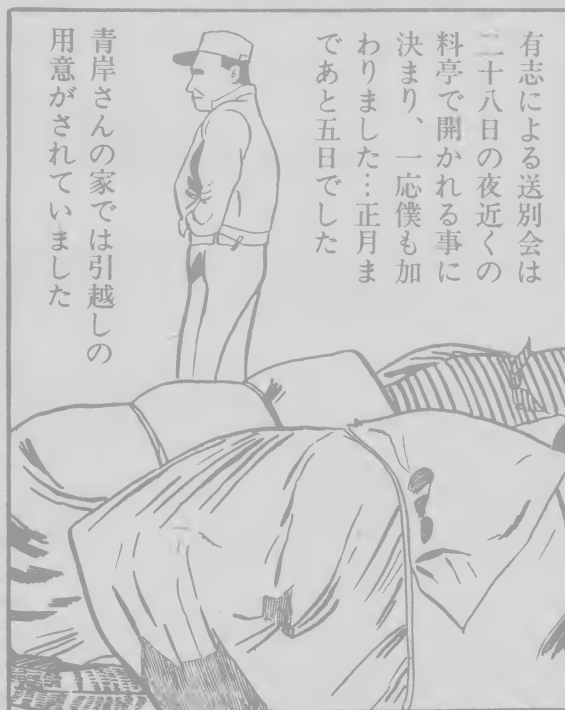
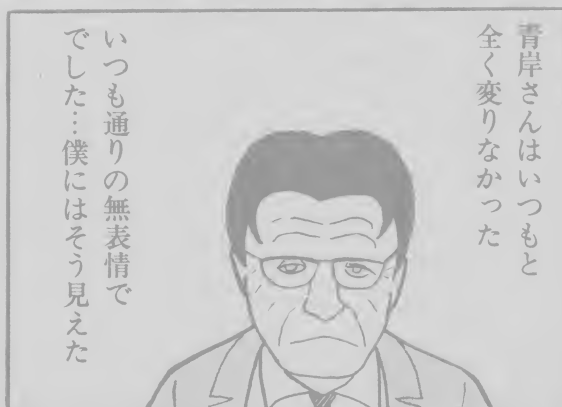
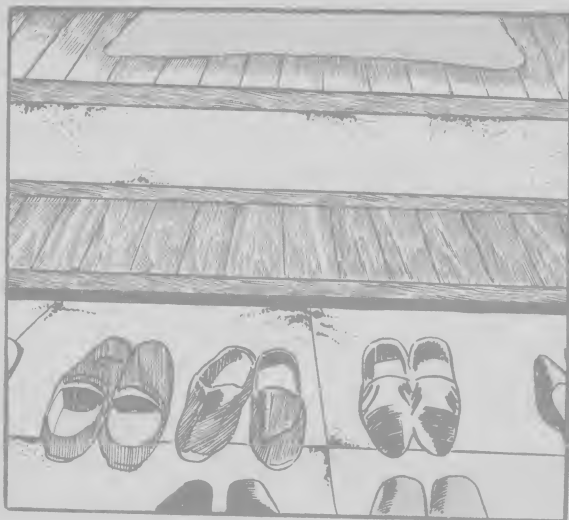
あなた
おふ…

お風呂
丁度良い
のですけ
ど……
あなた
………

お
お
すまん
すまん
うっかりしとった

あなたは
時々、恐い顔してる時
があるけど…一体何を
考えているのでしょう
ねえ………

下らん事
さ…ハハハ
どうでも
いい事さ
どうでも……

それはそうでしょう
時期的な事もあるし
それに来年早々、転任地に
向かわなければならなかっ
たのだから………

僕のいる職場へも
やって来ました

あの晩
青岸さんは
余り飲まなかったと思います
酒は弱い方なのでしょう。それで可成り赤い顔をしていました
実に静かな
送別会でした
工場長の形どおりのあいさつがあって終る二時間ばかりの間……
出席者はそれぞれ
勝手な雑談に
終止していた
ようです
……
青岸さんが一人所在
なげにしているのが
ひどく印象的でした
結局二次会と言った
ものもなく青岸さん
と僕は一緒に帰る事
になった訳です

師走の街は
にぎやか
でした

宴会場でさほど飲んだとは思えなかったのですが一緒に歩く青岸さんは可成り酔っている様子に見えました。
中央通り

十七年
ながすぎ
たよ…
実際

この頃
私はある事
に気がついた

サラリーマンてのは可もなく不可もなく勤めててはいけないのだなあ…私はそれで良いと思っていたのだが……

私は別に野心を持った事もないだから大きな失敗をしなければ今のままで行くと思っていたよ……

万年係長
私はそれで
結構だった
……

これじゃいかんなと
考え始めた時
転勤の話が出
たのさ…
正直なところ
しまったと思った

だが…
もういい
ハハハハ

田舎の生活も
いいじゃないか
……
のんびりした
生活を私はのぞん
でいたかも知れない

そうです
田舎の方がのん
びりしていて良
いです…

どう言う訳
か、私は
もう何もかも
どうでもいい
ような気分に
なってしまう
事がある……

そう言う気分はやりきれないものです……だが一体なぜそうなるのでしょう？

…………
なぜだろうね………

ハハハハ酔った………酔ったのかな？

今年もどうやら終るか……

…………

こんな遅くまであの人達も頑張ってますね……

青岸さん
よしましょうよ
……どうも
悪い酒だった
ようですね……

いやだなあ
つくづく……
考えてみりゃあ、あの
二人は、私……いや私等
自身じゃないか？

帰りましょう
か？

帰ろ
う……

別に
感傷
的にな
る必要
はなかった
んだ……酒の
せいなんです
よ、これは

青岸さん
向こうへ行ったら
頑張って下さい

ありがとう……
何んだか変だな
ははははは

ああ、どう
やら酔いが
さめて寒く
なってきたね
……………
走ろうか
？

軍隊で私は
さんざん走らされた
ものさ…………突撃
伏せ！　又突撃ってね

さぁ
君行こう
……
突撃だ

こんな夜にかけ
だすのも
面白いものです
ね
いち
に…

いちに
いちに
………

はあ
はあ
まあ判りますけど…
しかしばからしい

青岸さあん……
はあ
はあ
僕はもう息が切れて………

青岸さあん
冗談はもうやめましょうよ

はあ
はあ

はあ
はあ

はあ
はあ
はあ
はあ
完

「カムイ伝」論争にふれて

右島一郎（千葉・20歳）

小池君、君の意見（1月号本欄）にも傾聴すべき点はあるが、全体としてあまりに独善的です。

君は、「秋元君は、芸術とイデオロギーとを混同している」と言いますが、彼の意見には、少しもそんなところは見られません。君の方で勝手に読みちがえ、無意識的に論点をすりかえてしまっているのです。

君が秋元君の文章から引用した「ブルジョアに視点をあわせた作品を白土三平が書くのは、彼の立場からして不可能であり、こういう思想性を前面に押し出した作品では、作者は作中のある階級の立場をとらざるを得ず、したがって、この種の作品には「全階級的な立場などあり得ない」」という意見のどこに誤りがあると言うのですか。

「カムイ伝」のような、プロレタリア芸術的作品に全階級的な立場などあり得ようはずがなく、君が引き合いに出したトルストイも、「戦争と平和」（本当の原題は「戦争と民衆」）では、唯物史観に立ち、「復活」では、はっきりと、労働者農民等、被抑圧階級の側に立って、革命を求めているではありませんか。

小池君、君の意見は、秋元君の「プロレタリア芸術としてのカムイ伝」についての意見を、芸術一般を無原則的に勝手に拡大して、批判しているにすぎないのです。秋元君の意見は、スターリン主義に関する認識が欠除しているという点（これは非常に重大な欠陥ではありますが）をのぞけば、まったく正当です。人民の直接的参加によって、スターリニズムを排しつつ正しく運営される社会主義社会に人間性の崩壊など有り得るはずがないと思います。

最後に、白土三平氏が、民衆の側に立ち、唯物史観に立っていなければ、「カムイ伝」という作品は、存在し得なかったということをつけ加えておきます。

ぼくの内なる佐々木マキ

菅井美智（宮城・20歳）

佐々木マキのマンガは、ぼくにとって激烈にリアルだ。リアリズムの極地にあるように見える白土三平なんかより、はるかに現実的であり、確かな共有部があるのだ。

なぜそうなのか。ぼくは、それは、〈言葉〉のもんだいだと思う。ぼくの記憶している限りでも、彼のマンガにはわずかながら言葉もストーリイもある頃もあったのだ。それかいつのまにか言葉が消え、題名が消え、残ったのは、論理によるコミュニケーションを拒否した画ばかり。

1月号は一転して漢字ばかりの〈言葉〉にふちどられたけれど、これは本来の伝達性の言語表示ではない。ぼくらはそこにある漢字を〈読む〉のではなく〈見る〉ことによって一つの幻想の世界を画像（文字）と自己の内部との関係性から構築する。このことは、やはり文字が一つの画像にすぎないことを意味する。言葉が自らの内実としてもっていた論理性、意志伝達の媒介性はここでは、完全に拒否されているのである。

さてその〈言葉〉の拒否が、なぜぼく自身と関りあうのか。交点は一見意外なところに存在しているのだ。即ち、ゲバ棒と投石の思想性のなかに。

ささやかに武装したぼくらの実力闘争を、つまるところ日帝打倒、政治権力の獲得へと収束させていく反代々木諸派の中にある一つの擬制に、ぼくらは今気づきつつある。論理は飛躍するが、それでは究極的に、それなりの情勢分析の上から政治的有効性のもとに、ぼくらに向けてありとあらゆるバ声を投げつける〝反体制〟官僚と思想的に同一平面上なのだ。スタティックな幻想の大衆性の上に虚構した力関係なるとらえ方の不毛さをあばき出し、〈生ける人間〉として自らを解放し自立を志向する地点に唯一、おそらく唯一の武装の必然性はある。

そしてその地点まで降りていった時、現在のアジテーションは全く意味をなさなくなるのだ。即ち〈言葉〉は絶える。コミュニケーションを前提とした言葉＝政治的言語は絶えるのである。なぜ新宿へ、なぜ羽田へ行くのか、という問に対し、「今日本帝国主義は―」に始まる一連の論理で答えることはいくらでも可能である。そしてその論理は、間違っていることはない、と思う。が、あやまっていないが故に、それは同時にぼくらの行為の全体性ではないのだ。

ぼくらが、ゲバ棒を手にする時、それなりにかなりしんどいデモに行く時、その行為は決してコトバにならないもの、即ち政治のワクでつつみ切れないものを持っている。それが佐々木マキの〈言葉〉のないマンガと重なってイメージするのだ。ぼくらはもはやぼくらの行為が非伝達性をもっているのを、弱点としない。むしろ〈だからこそ〉と開き直るべきなのだ。

さて、ぼくは、佐々木マキがデモに行くのかどうか知らない。また知りたいとも思わない。ただこれだけは言えるだろう。それは、ぼくらが今のぼくらの深い沈黙部を表現する新しい〈言葉〉―といっていいか判らないが―を発見した時、彼のマンガにも〈言葉〉がよみがえるだろう、と。そして、彼自身にも言ってほしいのだ、オレのマンガに〈言葉〉が再生した時、オマエさんらの〈変革〉も可能になるだろう、と。

近頃の「ガロ」に感ずる

坂本永造（神奈川・18歳）

まず「カムイ伝」は、何とか早く決着をつけて欲しい。以前のように引きつけられるものは、今の「カムイ伝」

にはない。作者白土三平氏も、自分自身もういやになっているのではないだろうか。
次に「鬼太郎夜話」も以前の水木しげる氏の作品と比べて、見るべきものは皆無といってよいだろう。「鬼太郎夜話」は、単なるストーリーの並列、ギャグの並列に過ぎないと思う。一読者としては、以前の様な、水木氏の独壇とも言えるような当世批評ものをやってもらいたい気がするのだが。
次に今「ガロ」に関して、最も不満に思っていること二点を書き加えたい。
一つは「目安箱」である。筆者上野昂志氏は、はっきり言って、この様な評論、現代に対する批評を書く値打ちのない人だと思う。氏の文からは、一方的見地に自己をすべて没入させた者の書いた文という以外、何物も感じさせない。氏は、言葉をひねくりまわす（大学紛争のスローガンにみられる様な）ことに陶酔してるように見え、氏がりきんで書けば書くほど私には、こっけいに見えてしょうがない。一月号の「目安箱」にいたっては、何をか言わんや、である。ただ私が言いたいのは、上野氏が自分が自分の意見は正しく、自分のやり方はまちがっていないとするならば、それはそれでいいと思うのだが、「目安箱」と称するならば、違う意見の人のものも載せたらどうだろうか。今のままではそれこそ「反体制的難解的浅薄的一方的意見発表」の場にしかすぎないのではないか。
第二は佐々木マキ氏の漫画についてである。氏の漫画は漫画ではない。作者の心情の発露である、などと言う人もあるようだが、私に言わせれば、氏は怠け者だと思う。というのも、佐々木氏は、ストーリーも、登場人物も表現したいことも、よくねらずに、ただアイデアの奇抜性（セリフがないとか、画体が特殊であるとか）だけに頼っている。これは、小説を書く者にも、漫画を書く者にも共通していなければならない熱情、良いストーリーをつくろうとする熱情に佐々木氏が、欠けているとは言えないだろうか。
「ガロ」にも時々難解な作品かでてくる。しかし、それらは何かを感じさせてくれた。それはすなわち、作者が訴えたい事を、よくねったからだと思う。しかるに佐々木氏のは、ただ解からないだけである。解からないものを受け入れて喜ぶ人は、思春期の少女と大して変らない心境にある人だけだろう。
以上、文句ばかりつけたみたいだか、本誌に「ガロ」を買いに飛んでいくところをみると、自分はまだまだ「ガロ」の世界に浸っているようだ。それほど、「ガロ」は魅力があり、少年と青年の断層にいる私にとって、ぜひとも必要なものなのだ。

"ネピリム"佐々木マキ

原田荒士（愛知）

12月号、佐々木マキ氏の作品によって得た感動を、書いてみようと思う。何故なら、私は批評とは感動の表現であると思うからである。
一見して読者に明白なことは、この作品で氏は、劇画（仮にそう呼ぶならばである。私はこれをポップアートと呼びたい）におけるふきだしの効用に、逆説として技術的に、挑戦しているということである。が無論、この作品の意図はそれだけに止まらない。氏は、アーティストとしての限界をこえる読者への働きかけを、為そうとしているようである。
氏は、この作品の沈黙に包まれた世界の中に、ただひとつ「対話シマセウ」とのみ「音」を与えている。読者は、そのセリフを「耳」にしたとたん、それまでの空白のふきだしが、いっせいに何かを叫び出すのを感じはしないだろうか。それは私にとって、確かに悲しくある何かであった。
何かとは、当節流行りの言葉ではあるが、このサムシングという流行語ほど、現代的な流行語もあるまい。
それでは、その何かとは何か？
たった三コマしかないセリフのあるふきだしの中で、氏は初めに、一つの偶意を語ろうとしているようである。つまり、ケネディを思わせる指導者的人物のアップと、次の、群集の中の孤独なる者のセリフである、「対話シマセウ」と、「話シアイマセウ」とによって、氏は、政治なるものと民衆というものの間にはさまった無力感、そしてまた、民衆と呼ばれる人々同志の間の対話の無力感というふたつの無力感を語っているようだ。そして、しかし、氏はただそれだけにのみとどまろうとしない。それは、次のコマ、アンブレラを持ってポツンと立っている一人の男によって、明らかにされる。
この男は、アンブレラ一本を手にして、淋し気に、頼りな気に、一体、誰からの「話しかけ」を聞いているのだろうか。それは、また空白となって行くふきだしによって、解答を与えられている。この作品で氏は、真実、誰と誰との対話を希求したのであろうか？ えんえんと続く空白のふきだしの中に、読者は、神として神（あえてそう呼ぼう）に近く存在し、それ故に孤独を守る以外に方法のない人類の、悲痛で激烈な叫びを、その空しさ故に感じはしないだろうか？ ここにおいて、アンブレラの男のコマの持つ意味は明らかとなる。つまり、「雨⬇自然⬇神」である。男の持つアンブレラは、人の、自然であり、神である存在からの呼びかけへの拒否を意味していると考えられないだろうか？
このコマ以後、ふき出しは再び空白となり、人々は一度拒否した神よりの呼びかけを再び望み、無論のこと得ることを得ず、痴呆に近い、しかし、はなやかな笑みを顔いっぱいに拡げて、騒音の中の空白の中へ逃げこんで行くのである。ここで氏は、自己のエリートとしての誇りを前面に、あからさまに押し出しているのである。何故なら、読者は、これら女達の空白の笑いを蔑視する以外に、すべてを知らないからである。そして——
佐々木マキ。ここにおいてこの名は、この作品を通して、少々分に過ぎた名かもしれぬが、バイブルの言うネピリムたり得、だったということを人々に知らしめる。我々は氏を、神との交りを求めようとし、それを得ることの出来る「人＝芸術家」と呼ぶことが出来ないだろうか？ 私は、日本の芸術家に、その名を与えることの出来る者を、他に数人と知らない。

●編集部から 「読者サロン」へのご投稿はなるべく一〇〇〇字以内でお願い致します。ご投稿の際、住所・氏名・年令を明記して下さい。